
転生先は.....リリカルでマジカルなの.....

555

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は……リリカルでマジカルなの……

【Nコード】

N6143Z

【作者名】

555

【あらすじ】

ある日俺は3人組の小学生の女子共を助けて死んだ、そして気付くと死後の世界に居た。俺はどうやら転生させられるそうだが、でも普通の日常にチートなんか必要なくね？と考えたが、うん結論から言うとチートになっちゃった。てな訳で俺は原作ブレイクとか介入とかしないから

これは作者の暇潰し兼練習の処女作です。よって亀更新、駄文、グダグダの三拍子整った糞作品です。それでも良いと言う心の器が広い方のみどうぞ

俺は普通の日常に転生する事になった……………よね？

「で、ここどこ？」

何も無い空間で俺は気が付くと寝転がっていた。

「お主、ちつと寛ぎ過ぎじゃね？」

「おう爺さん、ここ何処よ？あんた誰？」

俺は目の前に現れた爺さんにここが何処か聞く事にした。

「ここは死後の世界。つまりお主は死んだんじゃ」

「ふ〜ん」

「いや…ふ〜んって…………」

別に疑っている訳じゃ無い。確かに俺は死んだからな。確か俺はあの馬鹿共が車に轢かれそうだったから突き飛ばして俺が身代わりになった筈だからな。

「でお主には転生してもらおう」

「え…やだ…」

「え？やなの？」

「首傾げんな気持ち悪い」

「ガーン」

実を言うと凄く眠いんだ俺。転生？知らないねそんな面倒な事なんかには付き合えるか

「本当にお願います！！！」

なんか土下座して来たんだけど。神様が。

「と、取り敢えず理由を聞こうか？」

俺は理由を聞く事にした。神様が言うには俺が突き飛ばした3人組の女子は本来事故に遭遇する筈は無かったらしい、つまり神様の書類ミスで彼女達は死まう所を俺が助けて俺のやった事が天界では受けが良かったらしく俺を転生させてくれるらしい。でも転生をさせなかったらこの神様はクビらしい。

「はア。わかったよ」

「本当かの!？」

「ああ、やってやるよ」

「では転生する際の特典を3個まで授けよう」

「いらねー」

「へ?チートでも何でも良いんじゃないぞ?」

「だって平穩に暮らすのに武器なんかいるか?」

「だ、だがな……」

「じゃあ、俺の生前の家族の幸せと俺が助けた奴等の幸せとクラスメイトの幸せを保証してくれればいい」

「そんなの力を使わない位簡単なのじゃが……」

「言われてもなあ。どの世界に行くのかも知らないし

「じゃあ、どの世界に転生するんだ?」

「うむ、リリカルなのはと言う世界じゃ」

アニメか?俺そう言うのあんま見てないんだよな。ガンダムは見てたけど。

「うー……」

それから俺は二時間考え込んだが何にも欲しい物が浮かんで来なかった為取り敢えず神様に全部任せる事にした。その為なにやら天界の神様が全員集まって会議をしているらしい。人間1人に大げさな。

「では、あの転生者の人間の魔改造を始める。では神様1君、彼の望みは?」

「はい、あの人間の望みは自分の傍の人間の幸せだそうです」

「欲が無いの?」

「前の転生者なんて凄いいちートだったのにね」

「なんだっけ?王の財宝と魔力SSSオーバーとイケメンだっけ?」

「デブのキモオタだったらしいよ?」

「あー、確かに笑い方がフヒヒだったからねー」

「あれ？アイツの担当って神ちゃんだっけ？」

「そだよー。でも今回の子は将来可愛い男の娘になるだろうねー」

「ねー」

「ゴホン、では魔改造は此方で仕切ろうか」

と言う事で何だかんだで決めたのが以下の通り。

・魔力ランクEX

・デバイスは超高性能のインテリジェントデバイスを一つと超高性能ユニゾンデバイスを一つ

・主人公の生まれは大分不幸。（中二病の神5が提案した）

・容姿は男の娘。（神ちゃんの趣味）

・レアスキルとして東方風に『何でも出来る程度の能力』を付加

・宝具などの武装系統は全て王の財宝に格納済み及び射出可能

・身体能力と知能は最高ランク

・アカシックレコードのアクセス権を取得

・演算システムヴェーダのアクセス権を取得

「オイ」

「どうしたんじゃ？」

「普通の日常にしてくれるんじゃ？」

「知らんのう。では行って参れ」

「……………は？」

そして行き成り俺の足元は宙に浮かび上がる。

「……………は？」

そして俺は落ちて行った。

俺は普通の日常に転生する事になった……………よね？（後書き）

どうでしょう？

自分には文才が全くと言って良い程に無いので誰かアドバイスを下さい。

感想と罵倒是非とも御待ちしております。

あの、ぼく、転生しました……………物凄く不幸ですけど……………

どうも、先日転生した者です。えーと現在5歳です、そして物凄く不幸です。何があったかかって？じゃあ簡潔に説明しよう。

・僕、ミッドチルダにて爆誕する（笑）

・僕の両親いきなりログアウト。管理局の仕事の際事故で死んだっぼい

・後日家に黒服の男の集団が押し掛けて来る、そして僕が聖王のクローン体と知る

・色々バイ実験される。四回死に掛ける

・研究所に管理局員が攻めて来る。僕は街に放り出される

・街を彷徨っている。残金210円。 今ここ

て訳だ、……………どうしようorz

てか管理局員アホ過ぎだろ！？なんで僕見てスルーしてどっかに行っちゃうの！？

はあ、マジでどうすんの？俺は一生を210円で過ごさなきゃいけないのかよ……………

「マジでどうすつか。こうなりや魔法でも身に付けて見るか」と言う事で思い付きで練習してみた。公園で。

結果は大成功。3日で大抵の初歩的な魔法は直ぐにでも撃てるようになった。公園のゴミ箱漁ってミッド式魔法初級編を拾わなかったら何にもならなかったがな。

それと魔法の修行の過程で『何でも出来る程度の能力』が使えるようになった。でこれでお金を創ろうとしたら何か出来なかった。何故……………orz

と言う事で所持金150円なので今日も、もやしを買いに行こうと思ひ近所のスーパーに行こうと思ひます。

少年移動中

という訳で着きました。それと今気付いたんですが、時期はStsなんですね、街で金髪の……誰だっけ？まあ良いやそれとあの魔王様が表紙の雑誌を見つけました。

「もやしもやしと、あった。ん？うお！すげえ！もやしが一袋十円だって!？」

と言う事でもやしを15袋買いました。よっし！所持金は0だけど食料は一杯確保したぜ！

よし！早速帰ったら調理だ！

少年移動中

忌々しい嗚呼忌々しい。え？何があつたかつて？それが自分の公園のベンチ（マイホームとも言つ）に帰宅したらピンクの髪の美少女と赤髪のイケメン野郎がイチャイチャしてんですよ。あ、別に嫉妬つて訳じゃ無いですよ？僕だって本気出せば女の子の一人位楽勝ですよ？

話が逸れましたが取り敢えず僕は先にもやしを調理しようと思いません。

少年の三分クッキング？開始！

まずもやしを袋から出します。

そして水で洗い蒂を全部筆ります。

そのご袋に戻して

終了です

少年の三分クッキング？終了！

え？もう終わりかって？当たり前じゃないですか、火も無いですし魔法なんて使つて管理局に保護される……なんて……

「いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ちよ、ちよつと!?!どうしたの!?!」

僕の素晴らしき土下座を披露すると声的に金髪の美女が此方に降りてくる。ヤバイ!殺される!!

「ごめんなさい!謝るのでどうか痛くしないで下さい!!!」

僕の土下座+命乞い+頭の上下運動で必死に許しを乞う。あ、ヤバイ。頭が割れる、血も出てきてる。一旦やめて二人の様子を見ようと顔を上げると

「だ、大丈夫?」

と僕に手を差し伸べる魔王様、普通は考えてこれは許してくれたと思うがそれじゃ駄目だ。なにせ魔王様の特技は砲撃魔法で趣味は砲撃を人に撃つ事だ。だから安心してはいけない。よって俺の行動は「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

土下座に限る。これを十数分繰り返した後でようやく僕は落ち着きを取り戻す。

「あ、あの、本当に僕は助かるのでしょうか?」

「うん、そうだよ?」

「あ、それよりさっきの魔力は君の?」

「ハイ、多分そうだと思います。」

「だったら貴方を管理局で保護します」

我が世の春が来たアアアアアアアアアア!

「是非!とも!!!お願いしたいです!!!」

俺はそのままやしを回収して管理局の本局に向かう事になった。そんな時に魔王様は僕に聞いてくる

「あ、そうだ、君って名前はなんて言うの?」

あ、そういえば僕名前付けてなかったな。前世の名前じゃなんか「サクヤ・イザヨイです。」

うん、東方なんだなこれが。理由?思いつきだけど?まあ顔は結構似てる方だしね?

と言う事で着きました、管理局。そして俺はまさかの機動6課で事情聴取をされる事になった。

因みに聴取の相手は努力の天才ことティアナさんだ

「でなんでサクヤちゃんはあんな所に居たの？お母さんとお父さんは？」

「えっと、単に住居と食料が無かったからで、両親は既に死去します」

「……………そう、で貴方は魔導師になる気はあるかしら？」

「うーんと、衣食住が保障されるなら？」

「どうして疑問系かは聞かないとして、衣食住は保障できるわ」

「だったらお願いします！！」

「え、ええ。それじゃあ私は部隊長に言ってくるわね」

「といってティアナさんは部屋から出て行く。そして数分が経ち三人の女性が入ってくる

「へー、君があのとんでも無い魔力の持ち主うちゅう子か」

現れたのはあの豆狸こと八神はやてさんだった。てか今気付いたら金髪の人ってフェイトじゃん！？」

「えっと、あの？」

「ああ、すまんかったな、うちの名前は八神はやてって言うんや。宜しくな？サクヤちゃん」

「あ、はい。」

「宜しくねサクヤちゃん」

「宜しくサクヤ」

「はい、宜しくお願いします。」

てか皆なんでちゃん付け？

「あの、何故僕の名前はちゃんなのでしょうか？」

「何故ってそりゃあサクヤちゃんって女の子やろ？」

「いや、僕は普通に男ですよ？」

「へ」

「へ？」

「「「えーーーーー!!!!!!」」」

「うえっ!？」

とまあテンプレ的な驚かれ方した後俺は魔力を測ることになったのだが

「予想外やな……」

「うん……」

「そうだね……」

結果ランクはEXらしい。それとさつき気付いたのだが僕のポケットに黒い宝石が付いた指輪と手紙が入っていた。手紙には『デバイスは入れといたぜ!!好きに使ってくれ!!by神様5』
神様5って誰だよ……てか5ってまだまだ居んのかよ……

と俺は軽く人生に挫折しかけていた時に所謂念話が掛つてきた

『問おう、貴方が私のマスターか?』

「セバー!？」

『冗談だ』

「冗談かよ!？」

『それはさて置き。とりあえず貴公がマスターで良いのかな?』

「あ、うん。名前はサクヤ・イザヨイだから」

『それなんて東?』

「うるせー!!そうだ、セットアップって出来る?」

『勿論。因みに我は超高性能だぞ?』

「ほう、してどんな機能が?」

『MS系統は全てインストールされている。MAは出来るが魔力が超無くなるから気を付けるよ』

「マジ!?てことはスローネットワークとかは!？」

『ふんサクヤよ?我を誰だと思っている?我だぞ?故に可能だ!!!』
よっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつっつ!!!!

「んじゃあ、早く早く!」

『その前に我に名前を付けて欲しいのだが』

「んじゃあガンダム繋がりでヴェーダで良いんじゃないか？」

『ふむ了承した。ではサクヤ行くぞ？』

「おう！逝くぜ（誤字に在らず）！ヴェーダ！」

『「セットアップ！！！」』

思えばこの時何故こんな所でセットアップしたのかは分からないが、数十分後の俺は直ぐに今の俺を殴り飛ばそうとするだろう。

ガチャ

「テストロッサ、例の書類だが

バトルジャンキほう」

そうここは6課の隊舎の中。つまりはこの戦闘狂がうるついている場所でもあるのだ。で、そこに見知らぬ奴がバリアジャケットを展開していたらこの人はきつと

「貴様、私と勝負しろ」

なんて言い出すのだから。

あの、ぼく、転生しました……………物凄く不幸ですけど……………（後書き）

正直言うと、駄文だなーと感じております。

そして見てくれる方には多大な感謝をしております更に感想をくれたら
作者は狂喜乱舞してしまいます。

と書いていたら、早速感想が！？菊ポン様本当にありがとござい
ます！！作者は土下座のやり過ぎで最早頭の原型を留めておりませ
んがそれでも感謝し続けます！！

というかこの展開は急すぎると思う……（前書き）

始めに言うておく物凄く急展開になっていきます。それと主人公はアンチ管理局のサイドになると思います。

それでもオツケーというアフリカ大陸位の心の器を持つ方はどうか応援してください。

というかこの展開は急すぎると思う……

「やめて！」

「近寄るな！」

この二人は？

「サクヤ！やめなさい！」

ああ、思い出したお母さんとお父さんだ

「サクヤ！」

でも何故僕はこんなにも拒絶されているのだろうか？

「寄るんじゃない！こっちに来るな！」

それはきつと僕が異常だからだろう。

僕は望みもしない転生と天性を手に入れた。でも所詮力は力、何時だって人を傷付ける道具でしか無い

だからこの人達は僕に傷付けられると思って僕を遠ざけているんだ。だから僕に構ってくれないんだ。

だからこの人達は死んでしまったんだ。

僕は何もしてないのに、何もしないのに、皆僕から遠ざかって行く。そうか分かった、僕は生まれてから死ぬまで絶対に

孤独なんだ

「……………気分悪い」

僕は目を覚ますとそこは知らない天井だった。まあ簡単に言つと僕は負けたのだ、シグナムさんに。

あの後僕はシグナムさんと模擬戦をして完膚なきまでに叩き潰されて気絶したんだっただと思う。

いやーそれにしても流石原作キャラ。強いね、紫電一閃に至っては見えなかつたもん

『当たり前だ、何故なら私の肉体強化のバックアップとファングの制御とかしてなかつたからな』

「なんでしなかつたし……………」

『面倒だからな』

「はいはい、そうですか」

取り敢えず僕はちよつとやる事が在る為管理局を出て行く事にしよ

うと思ってる。ん？なんでかって？

いやー夢を見てる時にちよつとやる事を見つけてね。なーに唯の転生者の集会みたいな物さ

「さ、行くかな。ヴェーダ、集合地点までの転移を頼めるか？」

『ああ任せておけ、管理局への隠蔽工作等はしておくか？』

「ん、頼む」

そして僕はこの場から転移して管理外世界への転移を行う。展開が急すぎてちよつと着いて行けないと言うその君！今はこんな感じだ！

- ・僕が管理局に保護される
- ・バトルジャンキ戦闘狂との対決で叩き潰されて僕気絶
- ・夢の中で同じ転生者から集会に参加を促される
- ・集合場所に転移する

こんな感じだ！うん、よくわからんな。

「と、着いたか？」

『座標地点へのズレは1mとも無い。流石我だな。』

そんなこんなでやって来たのは惑星「グラール」だ。ここはまだ管理局が見つけてない世界の一つでもある。辺りにはビルが所狭しと建っていて数で言えば東京都に建っているビル全てをここに建てたのでは？という位の数だが、その全てが外装は剥がれ鉄骨は剥き出しになってどれも本来の機能を有していない様だった。

「君がサクヤ君かな？」

「へ？」

僕は後ろを振り返るとそこに居たのは見ただけで安心しそうな人だ

った。巫女服とかじゃなくてジーパンにカッターシャツだけど。

「えっ……………」

「失礼、私の名前は中央ちゅうおうだよ。」

「定ちゃんの良いのかな？」

「好きに呼んでくれて構わない。それより君の能力を教えて欲しいな」

そついうと定ちゃんは目をキラキラさせ始めた。なんか言った瞬間キスされそうだ、まあ大丈夫だと思うけど

「確か『何でも出来る程度の能力』だったと思います」

「ふむ、程度が付くという事は、東方の能力を元としたオリジナルという事で良いのかな？」

「オリジナル？」

「あつと、知らないか、先に言うと私の能力は『大嘘憑き（オールフィクション）』という能力だ。」

「それって、あの漫画の？」

「そうだよ、要は漫画やアニメ等のキャラクターの能力を元にした能力を『偽物』といって君みたいな元が存在しない完全オリジナルの能力を『オリジナル』というんだ。」

「成る程、でオリジナルと偽物に何か違い等は在るんですか？」

「まず決定的に違うのは力の強さだ。例えば君のオリジナルには私達の『偽物』の力が何人束になっても勝つ事は出来ないんだ。」

「と言う事は、オリジナル>偽物って事で良いんですか？」

「基本的にはそれで構わない。でも必ずしも偽者は本物に敵わない訳じゃない。本物が偽者に罠に掛ったり奇襲を受けたり単に戦闘経験が無くてサンドバックにされる事だってある。それに原作キャラには世界の修正力という途轍もない力のバックアップが存在する。だから原作キャラにはどんなチートを持っていようとも私等は敵わ

ないのさ」

「だから僕はシグナムさんに勝てなかったのか……」

「そうさ、現に彼女の斬撃は見えなかっただろう？ 実際は目に追える速度では在るけど私達にはそれが見えないのさ」

なるほど、つまり僕が原作キャラに勝つには世界に勝たないといけないのか

「それより私達の秘密基地に案内してあげるよ」

「ああうん」

少年少女移動中

「着いたよ」

歩いて数十分、結構遠かったぜ。着いた先のビルは何故か他のビルと違って綺麗だった。階数は十階位は在る

「あの、定ちゃんどうしてこのビルだけは綺麗なの？」

「ん？ ああこれ？ まあ秘密基地は立派にしたいからね、私がビルの損傷を『無かった』事にしたただだよ」

うおおやっぱ便利だなそのスキルは。てか僕のスキルって何でも出来るって事は他のスキルのコピーとか出来ないのかな？ でも空は飛べないしな、制限とか限度はあるって事か。

僕と定ちゃんはビルの中に入る。元はどうやらマンションらしい。そしてエレベーターに乗り十階の所で降りて『1010号室』の前で止まる。てか電気通ってるんだ

「ここが私達の部屋だよ」

中には僕と定ちゃん以外に4人の人達が居た

「紹介するよ、一番右端に居る子が東野湊ちゃん(とうのみなど)で隣の子が南瀬乙ちゃん(みなみせおと)でもう一つ隣が西野篠ちゃん(にししのし)で最後が北井竹刀ちゃん(きたいししない)だよ」

「よろしくね」

「……………ふっ」

「よろしくですー」

「あんまり私に期待しないでね」

うわー、何かなー、名前に関しては何も言うまい。駄菓子菓子、二人目、貴様なんで僕を見て鼻で笑った？てか4人目、名前がちよつとアレだろ。あ、名前に関して言っちゃった。じゃあそんな時にいう事といえばこれだろ

「うん、よろしく。」

その後は細かな自己紹介等をした。何でもこのマンション(マンション名は安心アパート)の電力は全て湊ちゃんの能力による物で食料や生活用品の創造は竹刀ちゃん(たけや)で家事全般は篠ちゃん(しの)が担当らしい。で乙ちゃんはNEETまっしぐららしくて皆困っている様だ。それと定ちゃんはこの東西南北ちーむのリーダー

そこでふと僕は疑問に思った事を定ちゃんに聞いてみる

「そっぴやこのちーむって何すんの？」

そして定ちゃんは僕の言葉を聞くと笑いながら行って来る

「管理局と管理世界を滅亡させる事かな」

というかこの展開は急すぎると思う……（後書き）

どうも。相も変わらず駄文です。えーと急展開すぎて着いていけないと思います。何とか頑張っつけて着いて来て下さい。

後ペースとしては一週間に三〜四回程投稿できればと思っております。

それとオリキャラとオリジナルの能力を感想にて募集したいと思います。というかオリキャラの名前とかが全く思い付かないのでどうか読者様の頭脳をお貸しください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143z/>

転生先は.....リリカルでマジカルなの.....

2011年12月24日06時50分発行